



インタビューへのまえがき(第Ⅰ部 新書編集者 山崎比呂志さん)

古市, 晃

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 13:6-7

(Issue Date)

2021-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013391>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013391>



第Ⅰ部 新書編集者 山崎比呂志さん

司会 古市晃
同席 市沢哲・小山啓子

インタビューへのまえがき

なにがしかの知的好奇心を満たす手段として、新書を読むという行為は私たちの社会に長く定着している習慣といつてよいだろう。最古とされる岩波新書の創刊は一九三八年というから、新書の歴史はすでに八〇年を超えることになる。

新書に限らず、学術系の文庫、選書といった形で刊行される、いわゆる教養書というジャンルの書物は、市民にとつては容易には近づきたい知識の森への道しるべとしての役割を担ってきた。一方、書き手である専門家の側にとつて、教養書を執筆することは、市民向けにその分野の水準を呈示するという、啓蒙的な色彩を強く帯びていた。筆者が新書を手に取りはじめた一九八〇年代の半ばは、その執筆者の多くは大学に所属する研究者であつたように思う。ところがいつの頃からか——世紀が変わる頃が潮目だったか——執筆者の顔ぶれはしだいに変わ

り、今では、書店の棚にも非専門家の著作が増えてきた印象を受ける。インターネットにはじまり、SNSの普及などによる知をめぐる環境の急激な変化と共に、知の受け渡しの形もまた大きく変容を遂げているといえようか。

かつてしばしばみられたような、高みに立つ側からの一方的な知の伝授という形が受け入れられないのは当然としても、一定の学問的手続きを経た著作とそうでない著作が峻別し難く混在している状況は、混乱を招くだろう。真偽の判断がつきにくい情報が氾濫している今日にあつて、新書をはじめとする教養書は、知を伝達する著者と読者による解釈という「対話」を通じて、新たな知のあり方を担いうる存在であるように思われる。

こうした問題意識から、今回の「歴史研究の隣人たち」シリーズ第二回は、講談社現代新書編集部の中崎比呂志氏を迎え、新書、教養書をめぐるさまざまな問題についてお話しいただくことにした。山崎氏は、現代新書の前は講談社選書メチエに所属し、人文・社会系にとどまらず、執筆者と共に多くの良書を送り出してきた熟達の編集者である。加えて、その活動の時期は一九八〇年代から二〇二〇年代の今日に及び、この間の教養書の有為転変を教えてください。またとない方でもある。

インタビューでは、新書をめぐる状況にとどまらず、出版界の動向や、今日の社会における教養のあり方まで、多岐にわたる問題が話題となった。御味読いただければと思う。

(古市 晃)